

第1章

水戸市の概要



ダイダラボウ像 大串貝塚ふれあい公園のシンボルです。



第1章

水戸市の概要

第1章では、本市の自然的・地理的環境、社会的状況、そして本市の歴史的背景について説明します。

1 自然的・地理的環境

(1) 位置

本市は、東京から約100キロメートルの距離にあり、関東平野の北東端に位置する茨城県の県庁所在地です。市域の北側は那珂川を隔てて、ひたちなか市や那珂市に接しており、東側は太平洋に面する大洗町に、南側は茨城町に、西側は笠間市、城里町に接しています。市域面積は217.32平方キロメートルです。



図1-1 水戸市の位置(出典:『令和7年版 水戸市の概要』水戸市発行、2025年)



(2) 地形・地質

水戸の地形・地質は、西から①鶏足山塊、②丘陵地、③台地、④低地の4種類に大別されます。

① 鶏足山塊

①の鶏足山塊は、中生代ジュラ紀（約2億100万～1億4,500万年前）の付加体¹です。木葉下町周辺は鶏足山塊の縁に当たり、頁岩や砂岩で構成されています。岩体は地下深くに潜り込み、水戸の基盤層の一つとなっています。正確な深度は明らかではありませんが、中心市街地の地下数百メートルに岩体が存在していると考えられます。

② 丘陵地・③ 台地

鶏足山塊の岩体上に堆積し、②の丘陵地と③の台地を形成しているのが、もう一つの水戸の基盤層「水戸層」です。水戸層は新第三紀前～中期の中新世（約2,303万～533万3,000年前）に形成されました。石質は凝灰質泥岩といい、海底の泥が堆積してできたものです。海底の分厚い泥の堆積は、厚さ数百メートルに及ぶ水戸層を形成しました。

水戸層の上には、第四紀（258万8,000年前～現在）に形成された表層（見和層、上市礫層、関東ローム層）が堆積しています。見和層と上市礫層は、海や川の作用によって形成されたもので、水戸付近が海進と海退を繰り返していたことが分かります。

関東ローム層は、男体山・赤城山・榛名山・浅間山・富士山・箱根山等から噴火した火山灰が約13万5,000年～1万2,000年前に降り積もって堆積したもので、市内の台地上に広く堆積しています。層厚は4～6メートルが一般的で、下部は茨城粘土層と呼ばれる粘土層です。

④ 低地

台地下に広がる④の低地は、那珂川下流域を中心に広がる沖積低地です。

約13～12万年前、下末吉海進と呼ばれる海面上昇が起こり、関東地方に古東京湾という巨大な湾ができました。水戸はラグーン²となり、浅く穏やかな海が広がる景観でした。しかし、約2万年前の最終氷期最寒冷期が到来すると海岸線が現在より約120メートルも低くなり、強い侵食作用によって現在の那珂川流域を中心に深い谷となりました。その後海水面が上昇して土砂がたまり、広大な沖積低地が形成されました。

約7,000年～5,470年前の縄文時代前期には、海水面が現在より3メートルほど上昇し（縄文海進）、千波湖辺りまで海が浸入しました。千波湖南岸にある柳崎貝塚や元吉田町にある吉田貝塚はその頃にできた貝塚です。その後の海退により、水戸周辺はほぼ現在と同様の地形になりました。

¹付加体：海洋プレートの表面にできた岩石や地層がはがされ、陸地のプレートの先端に付加されたもの。

²ラグーン：海の一部が、砂洲等によって外海と遮断されてできた湖沼のこと。

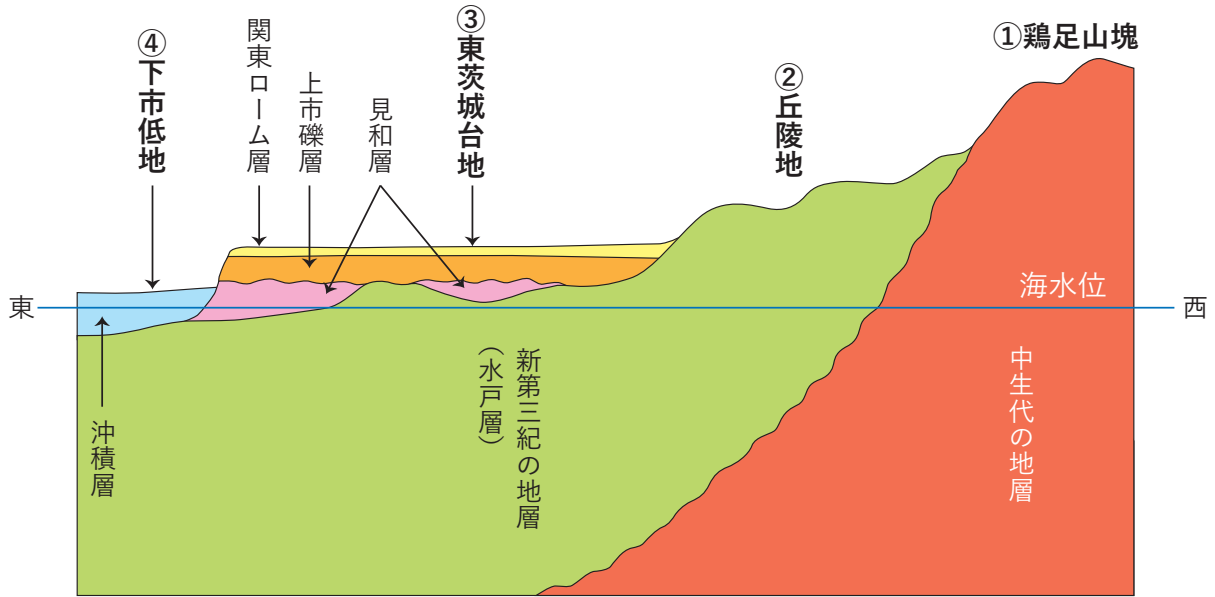


図1-2 水戸周辺の模式地質断面図(出典:『水戸の大地の成り立ち』水戸市立博物館発行、2020年)

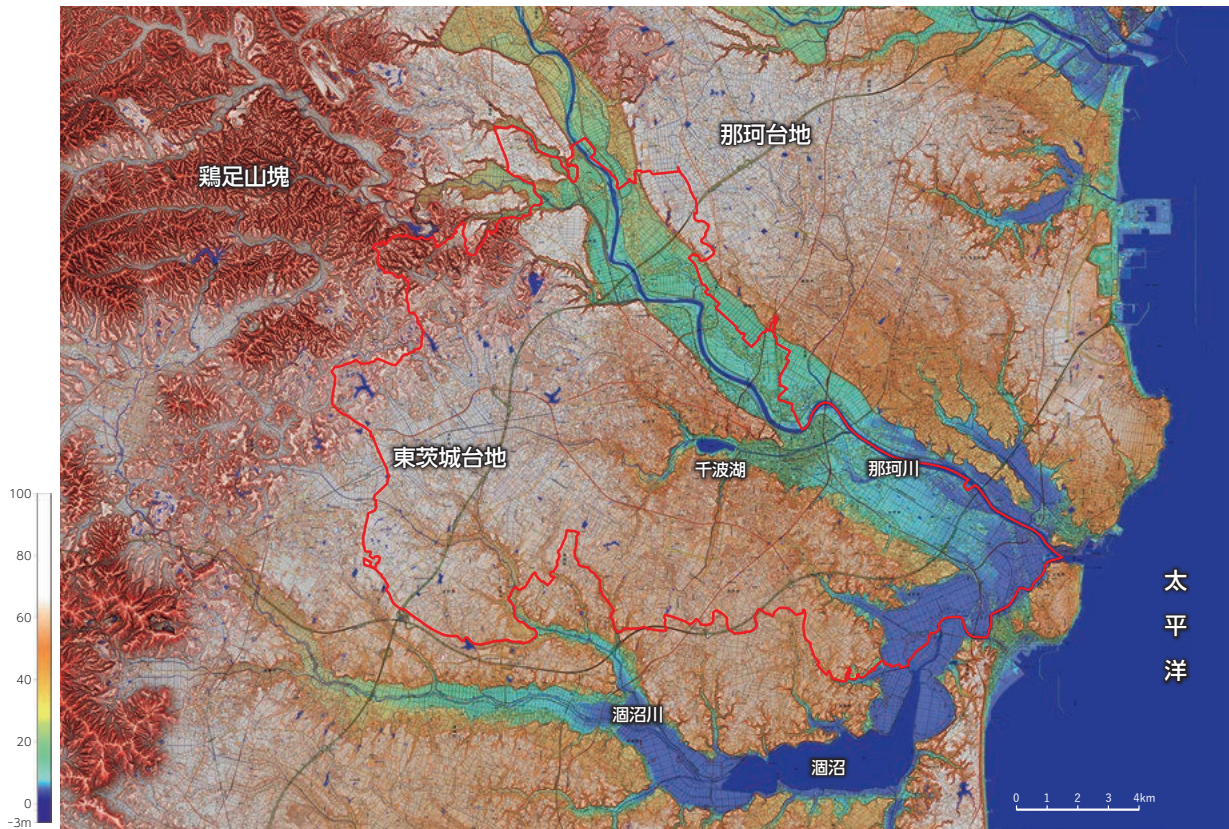


図1-3 水戸周辺の赤色立体図(出典:『水戸の大地の成り立ち』水戸市立博物館発行、2020年/制作:アジア航測株式会社) 赤色立体図は、赤色を基調とした色の濃淡で、標高の違いにメリハリをつけ、立体的に分かりやすく表現した地図です。西側の濃く赤い部分が丘陵地(鶏足山塊の外縁部)です。中央の白～茶色にかけての部分が台地(東茨城台地、那珂台地)、青い部分が沖積低地(那珂川、千波湖、澗沼川、澗沼周辺)です。図中の赤線が水戸市域です。



(3) 気候

① 概況

太平洋岸式気候に含まれる関東気候区の北東部に位置する本市は、2月に梅の花が咲き始め、春の気配が感じられるようになり、3月中旬に本格的な春を迎えます。この時期に毎年「梅まつり」が開催されています。

4月上旬には桜が開花し、5月上旬に日中の気温も20℃を超えて初夏の候に入ります。

6月から7月にかけては梅雨の季節となり、梅雨明けの7月下旬から8月末まで北太平洋の高気圧におおわれて盛夏となります。2024（令和6）年の最高気温は37.7℃で、次第に上昇しています。

秋は台風が来襲することもあります。本県を通過するころには勢力が弱まっている傾向があります。しかし、大雨が続いて那珂川や中小河川が氾濫することもあります。

10月から11月にかけては、大陸から移動性高気圧が周期的にやってきて晴天をもたらすとともに次第に寒くなり、初霜、初氷をみるようになります。その後、北西の季節風が本格化し、市内の千波湖や大塚池にシベリア地方から白鳥が飛来します。

本市の厳寒期は1月中・下旬で、最低気温は平均では-2℃くらいですが、年によっては

	年 別						年 別				
	気 温(℃)			平均湿度 (%)	降水量 (mm)		気 温(℃)			平均湿度 (%)	降水量 (mm)
	平 均	最高値	最低値				平 均	最高値	最低値		
平 年 値	14.1			74	1,367.7	2003年	13.3	34.6	-7.1	74	1,439.0
1981年	12.3	33.2	-8.0	75	1,217.0	2004年	14.4	36.4	-5.3	72	1,406.5
1982年	13.4	33.0	-8.5	76	1,445.0	2005年	13.4	35.6	-6.5	72	1,147.0
1983年	12.8	34.6	-8.0	75	1,299.5	2006年	13.9	35.1	-7.7	74	1,671.5
1984年	12.1	35.9	-11.0	74	760.5	2007年	14.4	37.0	-4.4	72	1,367.0
1985年	13.3	34.7	-10.6	75	1,464.0	2008年	13.9	35.2	-5.5	73	1,181.0
1986年	12.5	34.5	-8.5	75	1,294.5	2009年	14.2	34.2	-5.4	72	1,461.0
1987年	13.6	35.8	-6.5	75	1,148.5	2010年	14.5	36.1	-6.5	73	1,530.5
1988年	12.8	33.0	-6.5	73	1,446.5	2011年	14.1	36.5	-7.2	72	1,498.5
1989年	13.9	34.9	-5.9	75	1,683.5	2012年	13.9	36.3	-7.1	74	1,485.5
1990年	14.6	35.2	-7.6	75	1,490.5	2013年	14.3	36.3	-6.7	72	1,338.0
1991年	14.0	34.7	-6.0	75	1,948.0	2014年	14.2	36.2	-7.8	72	1,471.0
1992年	13.5	35.2	-5.6	76	1,327.5	2015年	14.8	36.5	-4.6	74	1,226.5
1993年	12.9	33.7	-5.7	77	1,393.5	2016年	14.8	36.9	-4.8	74	1,426.0
1994年	14.3	36.4	-6.1	76	1,236.5	2017年	14.2	35.7	-6.2	71	1,126.5
1995年	13.6	35.7	-7.0	74	1,254.0	2018年	15.3	37.6	-7.9	72	1,282.5
1996年	13.0	38.4	-8.9	73	1,162.5	2019年	14.9	36.3	-5.8	71	1,391.0
1997年	14.0	38.4	-6.0	75	1,073.5	2020年	15.0	37.6	-6.3	74	1,422.0
1998年	14.1	33.6	-6.1	82	1,663.5	2021年	15.0	37.4	-6.8	70	1,661.0
1999年	14.5	35.4	-6.8	73	1,272.0	2022年	14.8	37.1	-5.9	70	1,202.5
2000年	14.2	36.8	-6.6	74	1,400.0	2023年	16.1	37.5	-6.0	73	1,507.5
2001年	13.7	36.2	-7.4	72	1,243.5	2024年	16.2	37.7	-4.5	74	1,548.0
2002年	14.0	36.6	-5.8	72	1,180.0						

表1-1 水戸市の気象概況(出典:『令和7年版 水戸市の概要』水戸市発行、2025年)



−8℃くらいまで下がることもあり、凍結により水道が被害を受けることもあります。また、雪は12月末から3月にかけて、低気圧が日本の南岸を発達しながら通過するときに降ることがありますが、積雪はあまり多くありません。

② 気候変動の状況

本市の年平均気温は、年ごとの変動はあるものの、この100年間で約1.5℃上昇しており、日本の年平均気温の上昇（約1.2℃/100年）より高い状況となっています。真夏日、猛暑日及び熱帯夜の日数は増加傾向に、冬日日数は減少傾向にあります。

年降水量は、この100年間で約150ミリメートルの減少が観測され、無降水日数（日降水量1ミリメートル未満）は、100年当たりで約14日増加しています。

一方、1時間降水量50ミリメートル以上の県内の発生回数は増えています。

2 社会的状況

(1) 人口動態

本市の人口は、2025（令和7）年8月1日現在で推計265,823人となっており（2020年国勢調査確定値基準）、人口規模は県内第1位です。

1975（昭和50）年以降、生産年齢人口（15～64歳）の増加と団塊^{だんかい}ジュニア世代（1971（昭和46）～1974（昭和49）年生まれ）の誕生による年少人口（0～14歳）の増加、さらに、1992（平成4）年の常澄村、2005（平成17）年の内原町との合併等により、2015（平成27）年には270,783人に達しましたが、近年の人口は微減となっています。

年齢別人口の推移は、1990（平成2）年から2020（令和2）年までの30年間で、年少人口が11,786人減り、構成比は19.4パーセントから12.8パーセントへと大幅に減少した反面、高齢者人口（65歳以上）は46,621人増え、構成比は10.3パーセントから27.0パーセントへと増加しており、少子化及び高齢化が進行しています。

人口集中地区（DID）の推移については、昭和40～50年代は、人口の急増に対応した人口集中地区の拡大が見られましたが、現在は、人口集中地区の大きな変化はない状況です。一方で、地区内の人口密度が減少傾向にあること等から、緩やかなドーナツ化現象が続いているものと考えられます。

昼間人口は、本市は通勤や通学によって昼間に流入する人口が多く、昼夜間人口比率（昼間人口/夜間人口）は、1975（昭和50）年以降115パーセント前後となっています。これは、周辺の市町村と比較し、極めて高い比率で、本市を中心とする地方中核都市圏における拠点性、中枢性の高さを示しています。

地区別人口の状況は、市域の北部と西部で人口の減少傾向が見られる反面、南部で増加傾向にあります。

本市の将来人口は、約10年で約7,400人の減少が予測されています。こうした中、本市は若い世代から選ばれる都市づくりを目指し、安心して子育てできる環境整備や創業支援、多様な雇用創出等に取り組み、人口流入の促進、人口流出の抑制を図ります。



各年10月1日現在(単位:人、%)

区分	人口							
	総数	年齢別人口						増加率
		年少人口 (0~14歳)	構成比	生産年齢人口 (15~64歳)	構成比	高齢者人口 (65歳以上)	構成比	
1975年	197,953	51,086	25.8	132,988	67.2	13,753	6.9	13.9
1980年	215,566	54,190	25.1	144,246	66.9	16,885	7.8	8.9
1985年	228,985	52,265	22.8	156,547	68.4	19,971	8.7	6.2
1990年	234,968	45,471	19.4	163,764	69.7	24,301	10.3	2.6
1995年	246,347	41,878	17.0	171,231	69.5	32,372	13.1	4.8
2000年	246,739	38,317	15.5	168,589	68.3	39,359	16.0	0.2
2005年	262,603	38,118	14.5	174,321	66.4	49,935	19.0	0.4
2010年	268,750	37,340	14.1	169,886	64.1	57,793	21.8	2.3
2015年	270,783	34,839	13.2	163,039	61.7	66,236	25.1	0.8
2020年	270,685	33,685	12.8	158,472	60.2	70,922	27.0	△0.0

注1 増加率は、対前回調査と比較した率を示す。注2 総数は年齢不詳を含む。

表1-2 国勢調査人口の推移(出典:国勢調査、総務省統計局)

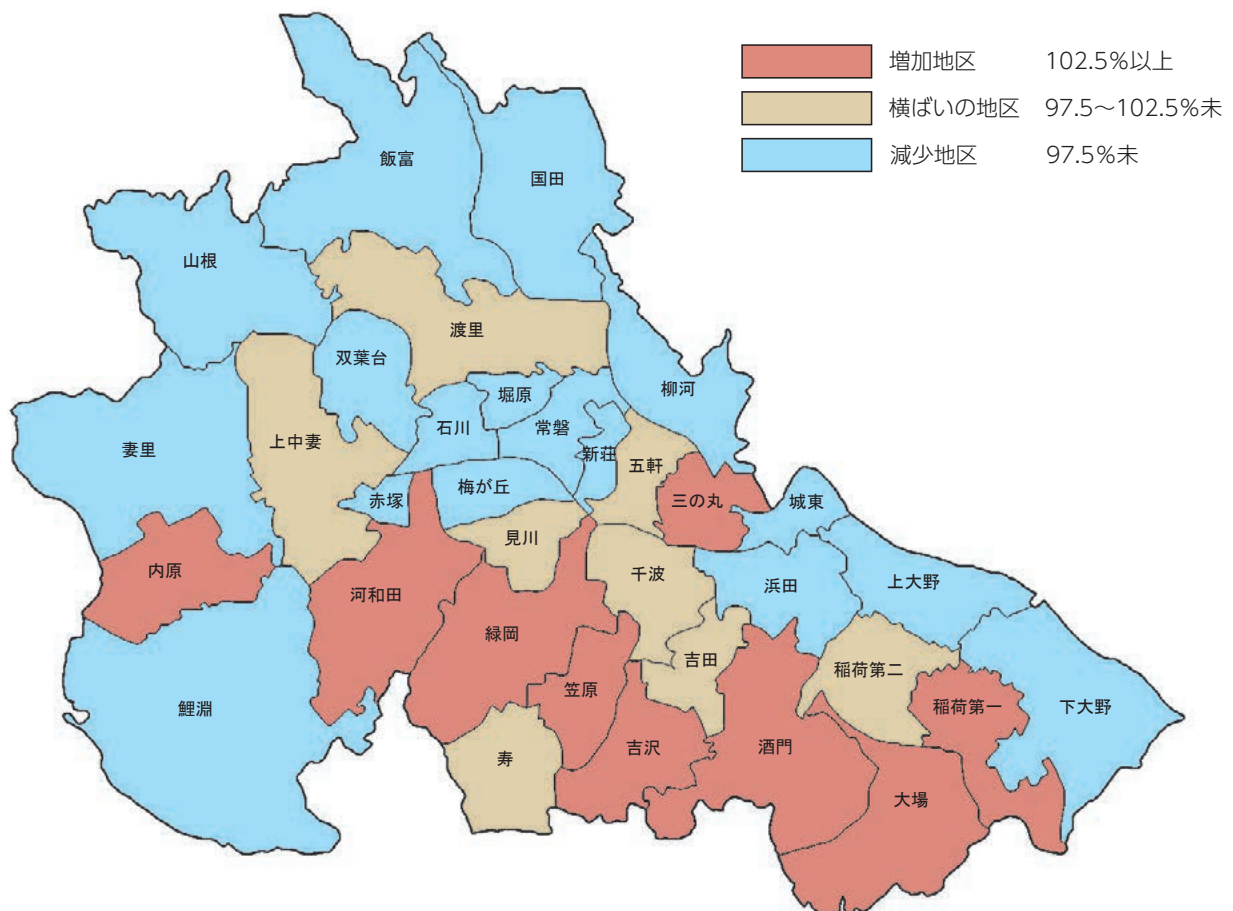


図1-4 地区(小学校区)別人口の動態(双葉台地区は旧双葉台地区と旧山根地区に分けて表記)
(2015年~2020年人口変化率/出典:『令和7年版 水戸市の概要』水戸市発行、2025年)

- 序章
- 第1章
- 第2章
- 第3章
- 第4章
- 第5章
- 第6章
- 第7章
- 第8章
- 第9章
- 資料

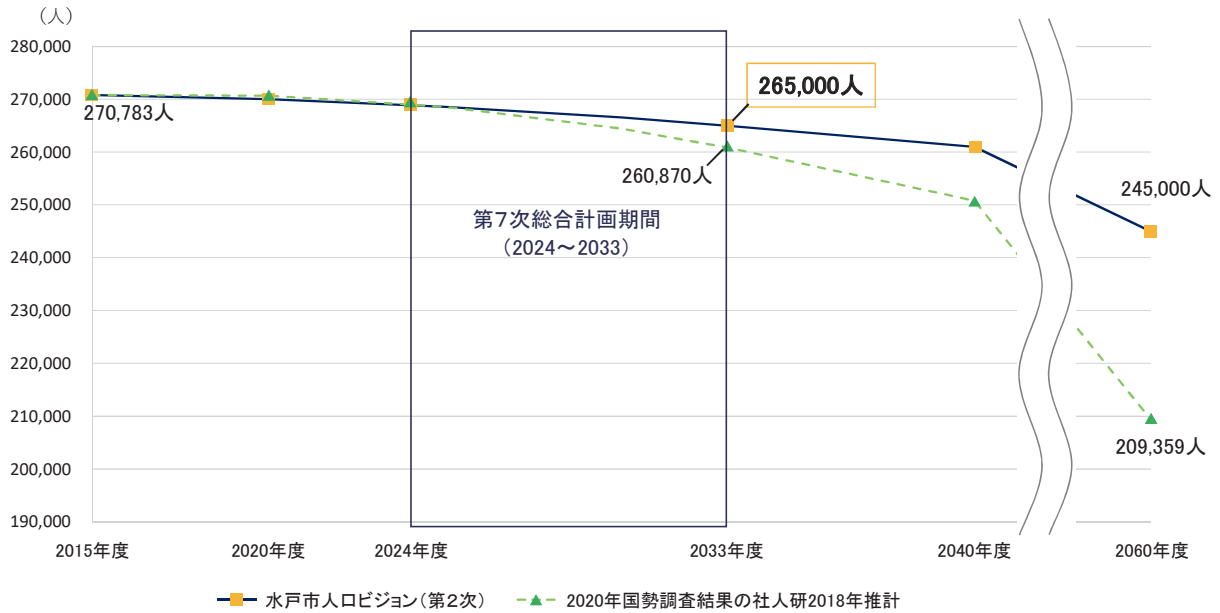


図1-5 目標人口と国の人口推計(出典:『水戸市第7次総合計画—みと魁・Nextプラン—』水戸市発行、2024年)

そして2033（令和15）年度の目標人口を265,000人に、2060（令和42）年度の目標人口を245,000人に定め、人口に占める年齢3区分別人口の割合として、年少人口13.2パーセント、生産年齢人口57.8パーセント、高齢者人口29.0パーセントを見込んでいます。世帯数は129,800世帯で、一世帯当たりの人員は2.04人を見込んでいます。

(2) 土地利用

本市の土地利用の状況は、2024（令和6）年1月1日現在において、農地と山林原野あわせ10,423ヘクタールと全体の約48パーセントを占め、比較的緑の多い都市であることがうかがえます。2005（平成17）年の内原町との合併により、農地・山林原野面積は大きく増加したものの、土地利用の推移を見ると、農地は減少傾向にあり、宅地化や耕作放棄による荒地化が進んでいると考えられます。

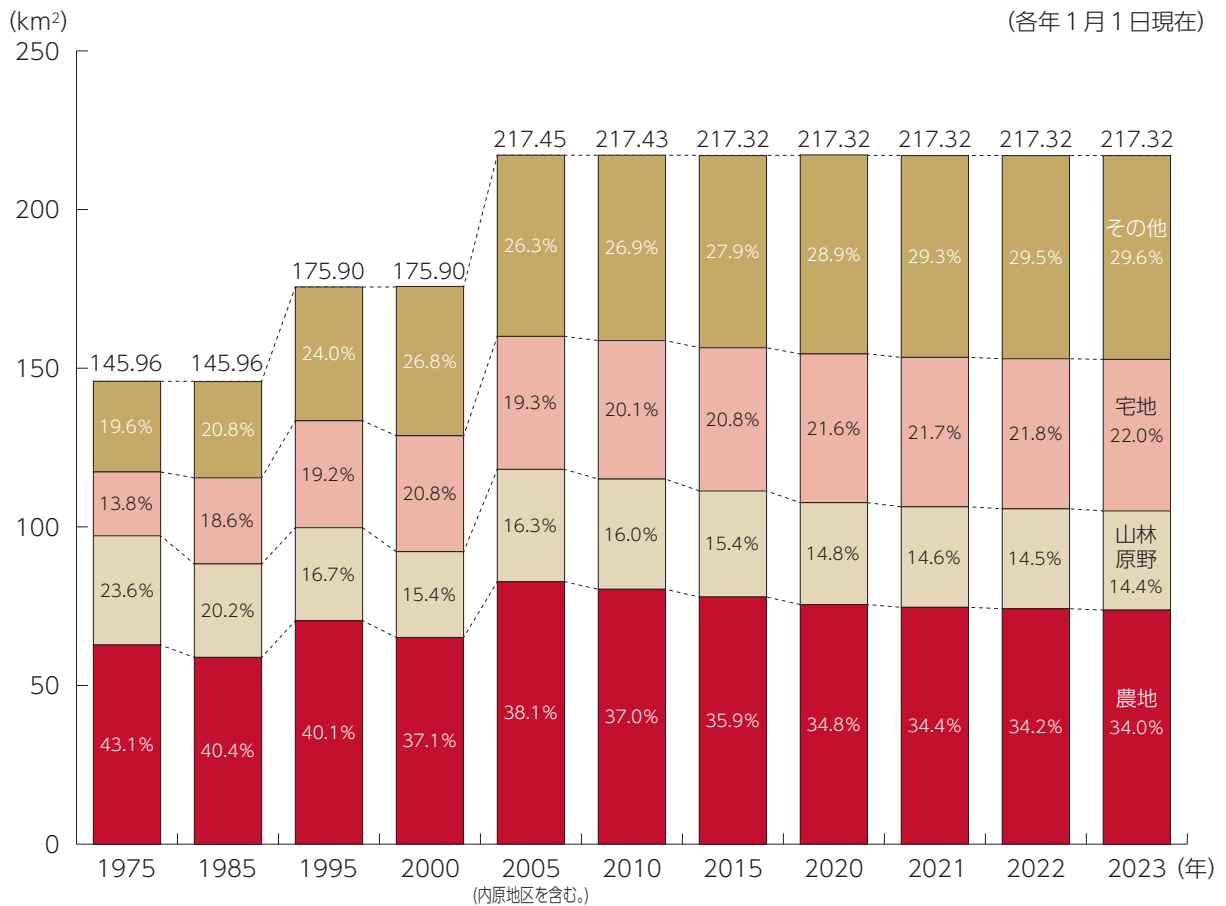


図1-6 土地利用状況(出典:『令和7年版 水戸市の概要』水戸市発行、2025年)

(3) 交通

本市を貫通する高速道路は、西部を南北に常磐自動車道（埼玉県三郷市～宮城県巨理町）が縦断します。また、東部では北関東自動車道（本市～群馬県高崎市）とそれに接続する東水戸道路（本市～茨城県ひたちなか市）が横断しています。

国道は、関東と東北地方を結ぶ国道6号（東京都中央区～宮城県仙台市）があります。国道6号は江戸時代の岩城相馬道及び水戸街道と大部分が一致します。また、国道118号（本市～福島県会津若松市）と国道349号（本市～宮城県柴田町）が走ります。関東地方の他の主要都市を結ぶ道としては、国道50号（本市～群馬県前橋市）、国道51号（本市～千葉県千葉市）、国道123号（本市～栃木県宇都宮市）があり、いずれも本市が起点となっています。

鉄道は、市街地中央に位置する水戸駅が、JR常磐線（東京都荒川区～宮城県岩沼市）の主要駅であり、JR水郡線（本市～福島県郡山市）、水戸線（茨城県笠間市～栃木県小山市。一部水戸駅直通）及び鹿島臨海鉄道大洗鹿島線（本市～茨城県鹿嶋市）のターミナルとなっています。

このように、本市は東北地方と関東地方を結ぶ結節点であるとともに、関東地方の他の主要都市への移動も容易である利便性の高い都市と言えます。

本市の路線バスは、バス事業者3社により、水戸駅を中心として主に茨城大学方面や赤塚駅方面、さらには市外へ、公共施設や教育施設、病院等の医療施設を結ぶ形でネットワークを形成しています。



図1-7 水戸市内の主要交通網図(出典:『令和7年版 水戸市の概要』水戸市発行、2025年)

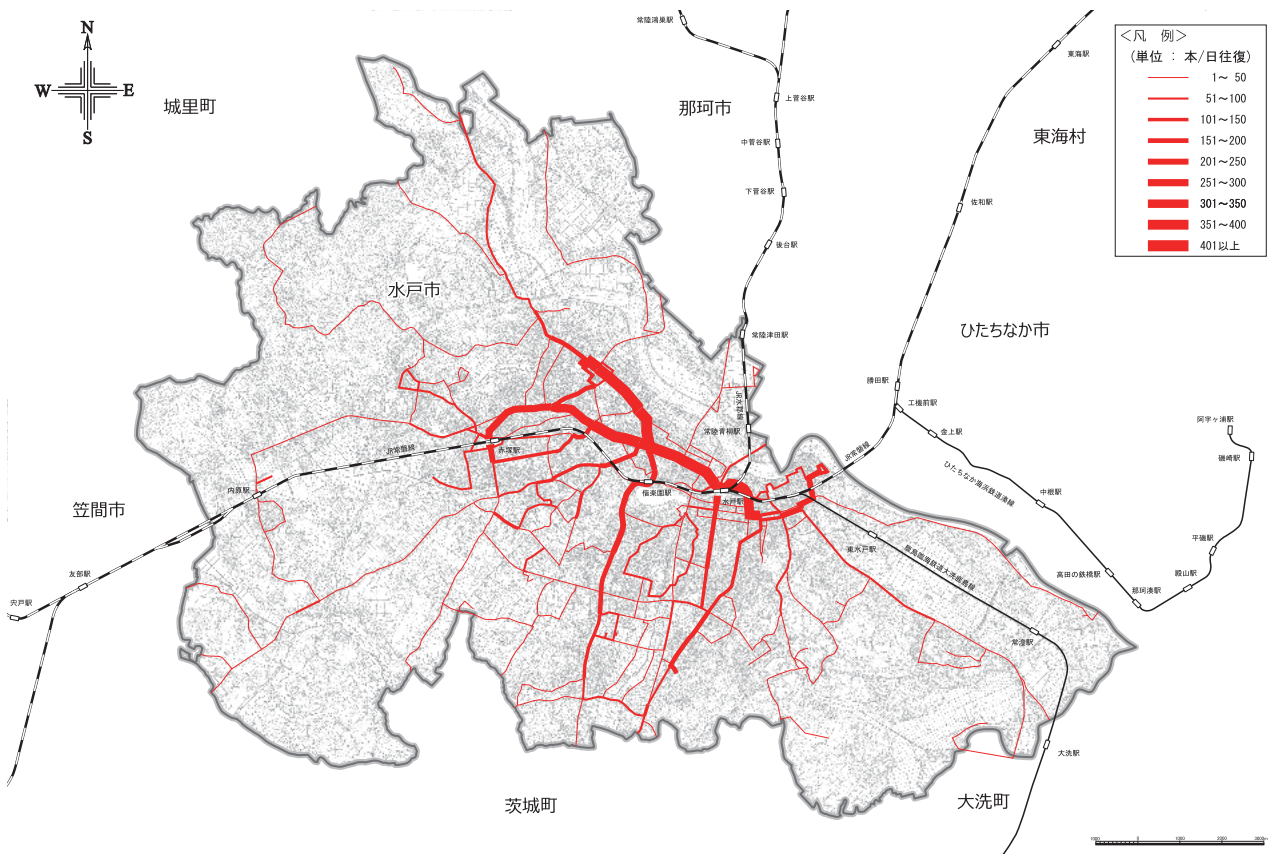


図1-8 路線バス運行本数(出典:バス交通実態調査、2022年度、水戸市)



水戸駅北口から大工町交差点までの国道50号は、市内交通の大動脈で、1日当たり約1,500本の路線バスが通行しています。その一方で、中心市街地以外の拠点間を直接結ぶ路線バスの運行本数は少なくなっています。

(4) 産業

本市の産業は、第3次産業の割合が86.8パーセントを占めています。2013（平成25）年に、情報通信の高度化、経済活動のサービス化の進展、事業経営の多様化に伴う産業構造の変化に適合するよう日本標準産業分類が改訂されましたが、約30年の間でも、産業別の構成比の大きな変化は見られません。農業を中心とする第1次産業は、事業所数は増加傾向にありますが、就業者人口は45年間で約5,500人の就業者が減少しています。

(単位:所、%)

区 分	1991年 (常澄地区含む)		2001年 (内原地区含む)		区 分	2012年		2021年	
	事業所数	構成比	事業所数	構成比		事業所数	構成比	事業所数	構成比
第 1 次 産 業	11	0.1	14	0.1	第 1 次 産 業	20	0.2	35	0.3
農 林 水 産 業	11	0.1	14	0.1	農 業 、 林 業	19	0.1	35	0.3
					漁 業	1	0.0	-	-
第 2 次 産 業	2,358	15.4	2,281	15.0	第 2 次 産 業	1,835	13.9	1,604	12.9
鉱 業	1	0.0	1	0.0	鉱業、碎石業、砂利採取業	1	0.0	1	0.0
建 設 業	1,472	9.6	1,555	10.3	建 設 業	1,288	9.7	1,177	9.5
製 造 業	885	5.8	725	4.8	製 造 業	546	4.1	426	3.4
第 3 次 産 業	12,937	84.5	12,871	84.9	第 3 次 産 業	11,360	86.0	10,803	86.8
電気・ガス・熱供給・水道業	15	0.1	18	0.1	電気・ガス・熱供給・水道業	20	0.2	28	0.2
運 輸 ・ 通 信 業	284	1.9	311	2.1	情 報 通 信 業	164	1.2	154	1.2
卸 売 、 小 売 業 、 飲 食 店	7,380	48.2	6,665	43.9	運 輸 業 、 郵 便 業	224	1.7	223	1.8
金 融 ・ 保 険 業	348	2.3	374	2.5	卸 売 業 、 小 売 業	3,615	27.4	3,119	25.1
不 動 産 業	640	4.2	766	5.1	金 融 業 、 保 険 業	361	2.7	328	2.6
サ ー ビ ス 業	4,181	27.3	4,648	30.6	不 動 産 業 、 物 品 賃 貸 業	1,008	7.6	955	7.7
公 務	89	0.6	89	0.6	学 術 研 究 、 専 門 ・ 技 術 サ ー ビ ス 業	727	5.5	776	6.2
					宿 泊 業 、 飲 食 サ ー ビ ス 業	1,630	12.3	1,380	11.1
					生 活 関 連 サ ー ビ ス 業 、 娯 楽 業	1,235	9.3	1,151	9.3
					教 育 、 学 習 支 援 業	408	3.1	410	3.3
					医 療 、 福 祉	873	6.6	1,113	8.9
					複 合 サ ー ビ ス 業	45	0.3	50	0.4
					サ ー ビ ス 業 (他 に 分 類 さ れ な い も の)	1,050	7.9	1,116	9.0
					公 務	-	-	-	-
合 計	15,306	100.0	15,166	100.0	合 計	13,215	100.0	12,442	100.0

注 1991年については7月1日現在、2001年以降については10月1日現在の数値。

表1-3 事業所数の推移(出典:事業所・企業統計調査、経済センサス、総務省統計局)



(5) 観光

本市の観光入込客数は、2015（平成27）年に日本遺産「近世日本の教育遺産群－学び心・礼節の本源－」に認定され、それに伴う誘致活動が進められるなどの取組を背景に、同年以降、年間360～390万人台で推移していました。

しかし、2019（令和元）年12月に報告された新型コロナウイルス感染症流行の影響により、2020（令和2）年には約143万人まで大幅に減少しました。

また、宿泊者数は、2019（令和元）年に約62万人、外国人の宿泊者数も約4.2万人を数えるなど、増加傾向で推移していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により2020（令和2）年には宿泊者数が約40万人に、外国人宿泊者数が約5千人にそれぞれ減少しました。

現在は、観光需要喚起策の効果等により、少しずつ回復の兆しが見えているところであり、特に外国人延べ宿泊者数は急増しています。

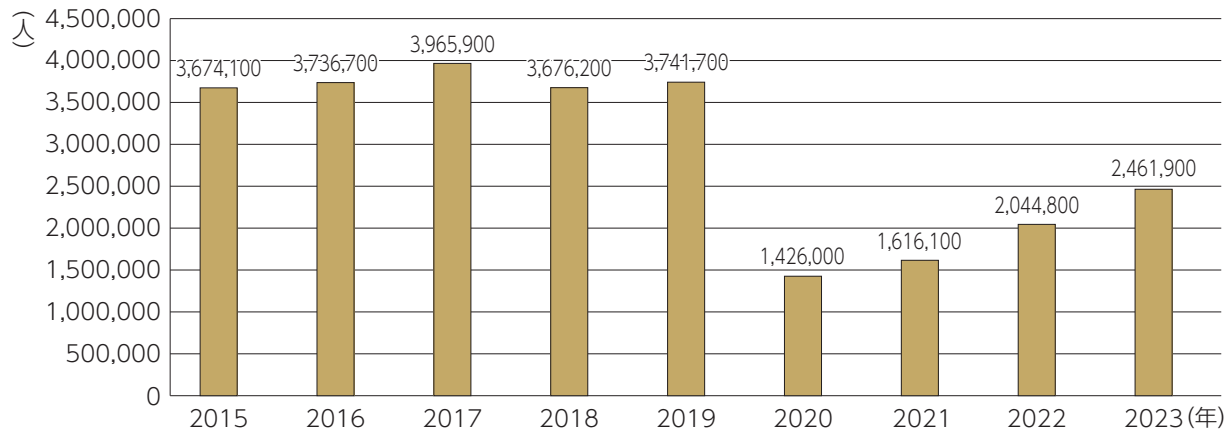


図1-9 入込客数の推移(出典:茨城県 観光客動態調査)

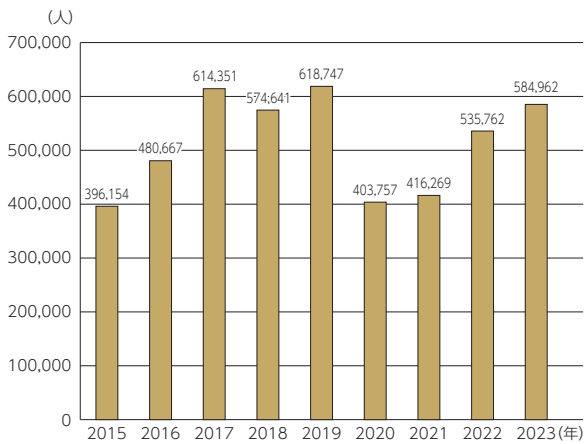


図1-10 宿泊者数の推移
(出典:観光庁 宿泊旅行統計調査)

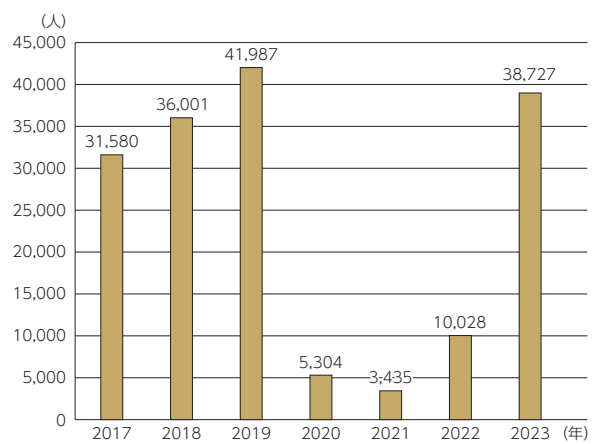


図1-11 外国人宿泊者数の推移
(出典:観光庁 宿泊旅行統計調査)



(6) 博物館

本市は近代以前から政治、産業及び文化の中心地であった歴史性により、歴史博物館、資料館、美術館、植物園、歴史公園等の博物館³が多く集積しています。設立主体別では、県立が3施設、市立が11施設（外郭団体を含む。）、私立が6施設あり、合計で20施設を数えます。施設数は県内第1位で、分野も自然、歴史、民俗、美術、考古など、幅広いのが特徴です。

① 県立の博物館

ア 茨城県立歴史館

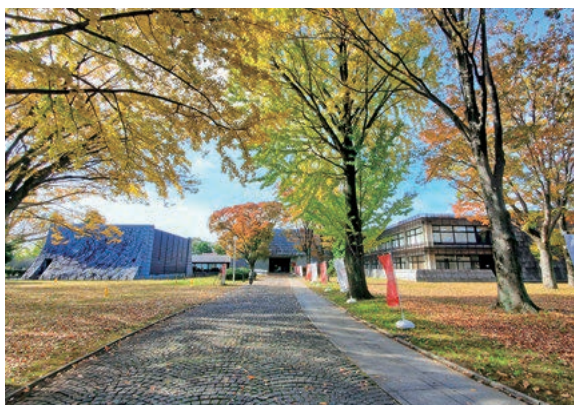
県立歴史館は、1974（昭和49）年9月に開館した歴史博物館です。茨城の原始、古代から近現代に至る歴史の流れを概観できる常設展をはじめ、特別展及び年数回の企画展を開催しています。また、一橋徳川家記念室も年数回の展示替えを行っています。偕楽園公園の一部でもある広い庭園には、県指定文化財である旧水海道小学校本館や旧茂木家住宅が移築されています。

イ 茨城県近代美術館

県近代美術館は、1988（昭和63）年10月に開館した美術館です。企画展では国内外の優れた美術作品を展示し、所蔵作品展では4,000点を超える近代美術作品の中から、横山大観など、茨城県ゆかりの作家を中心に展示しています。また、館南側には、本市出身の洋画家である中村彝のアトリエを新築復元し、彝の遺品や資料を公開展示しています。

ウ 弘道館

弘道館は天保12（1841）年8月の仮開館により開設された藩校で、施設そのものが文化財であるとともに、弘道館関連資料を収集、保管、展示及び調査研究を行う博物館でもあります。重要文化財建造物である正庁、至善堂や復元建造物である国老詰所内に常設展示しているほか、特別展示や企画展示も年数回開催しています。



茨城県立歴史館(緑町)

県内の歴史資料を収集・展示しています。文書館と博物館の機能を持つ施設です。



茨城県近代美術館(千波町)

茨城県ゆかりの作家や国内外の近現代美術作品を収集・展示しています。

³博物館：地域計画では、博物館、資料館、美術館、植物園、歴史公園など、資料の収集、保管、展示、教育、調査研究等を行う施設を「博物館」と定義します。博物館は、博物館法に規定する「登録博物館」及び「博物館指定施設」と、文部科学省社会教育調査上の分類である「博物館類似施設」の三つの分類があり、地域計画は3分類全てを「博物館」の用語内に含むものとしします。



② 市立の博物館

ア 水戸市立博物館

市立博物館は、1980（昭和55）年に開館した、自然、歴史、民俗及び美術の4部門からなる総合博物館です。収蔵資料は6万点を超え、水戸市立の博物館では最多の文化財を有しています。

本市の自然、歴史、文化の特性や現状について広く理解できるよう、館の2階は歴史、民俗、3階は自然、美術Ⅰ、4階は美術Ⅱという構成で毎年テーマを変えて常設展を開催しているほか、おおむね年3回の企画展、特別展を開催しています。

イ 水戸市大串貝塚ふれあい公園（埋蔵文化財センター）

大串貝塚ふれあい公園は、1991（平成3）年に開園した、国指定史跡大串貝塚を保存・活用した歴史公園です。園内には『常陸国風土記』に記録のある巨人の像（ダイダラボウ像、高さ15.25メートル）が建ち、常澄地区のシンボルとして親しまれているほか、台座部分は展示施設としても活用されています。

また、園内に埋蔵文化財センターが設置され、本市における埋蔵文化財の調査及び保存・活用の拠点として機能しているほか、センター内の「縄文くらしの四季館」では、市内の主要な考古資料が常設展示され、おおむね年1回企画展を開催しています。

ウ 水戸市内原郷土史義勇軍資料館

内原郷土史義勇軍資料館は、2003（平成15）年に開館した、満蒙開拓に特化した国内唯一の公立博物館です。内原地区の郷土史と満蒙開拓青少年義勇軍に関する資料を収集・展示しています。敷地内には内原訓練所に当時建てられていた独特の形式を持つ宿舎である日輪兵舎が復元されています。

エ 大塚農民館

大塚農民館は、1986（昭和61）年に開館した民俗博物館です。農民の生活を後世に伝えたいという大塚町出身の市民により建設され、同年2月に本市に寄贈されました。館内では農具等の民具を展示しています。

オ くれふしの里古墳公園

くれふしの里古墳公園は、1998（平成10）年に開園した、牛伏古墳群を活用した歴史公園です。園内には16基の古墳群が現存しており、うち4号墳が整備されています。また、はに丸タワー（高さ17.3メートル）は、内原地区のシンボルとして親しまれています。

カ 水戸市平和記念館

平和記念館は、2009（平成21）年に開館した、戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝える平和博物館です。館内には水戸空襲による被災状況や戦時中の市民の生活、戦後の復興に向けた水戸のまちについて当時の資料やパネルを用いて展示しています。



水戸市立博物館(大町)

市制施行90周年を記念して創設された総合博物館で、市立中央図書館が併設されています。



埋蔵文化財センター(塩崎町)

市内の埋蔵文化財の発掘調査や出土品の整理・展示、体験教室の開催等を行っています。



内原郷土史義勇軍資料館(内原町)

国内唯一の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所跡地近くに建つ、満蒙開拓に特化した資料館です。



くれふしの里古墳公園(牛伏町)

牛伏古墳群を中心に整備され、楽しく遊びながら古墳について学ぶことができる歴史公園です。



水戸市平和記念館(三の丸)

空襲や戦時中の生活に関する資料やパネルを通して、戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えています。

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

資料



キ 植物公園

植物公園は、1987（昭和62）年に開園した植物園です。園内にはテラスガーデン、観賞大温室、熱帯果樹温室、植物館、芝生園、ロックガーデン、水戸養命酒薬用ハーブ園等があり、特に植物館では年間を通じて展示会や講座等が開催されています。

ク 水戸城跡二の丸展示館

水戸城跡二の丸展示館は、2012（平成24）年に開館した、第二中学校内に併設された博物館です。日本遺産「近世日本の教育遺産群－学ぶ心・礼節の本源－」を構成する弘道館や偕楽園など、市内の教育遺産や水戸城に関する資料やパネルを展示しています。

ケ 水戸城二の丸角櫓

水戸城二の丸角櫓は、2021（令和3）年にオープンした復元建造物です。角櫓内は展示施設となっており、水戸城の歴史や歴史的建造物の復元整備に関する資料やパネル等を展示しています。

コ 水戸市水道歴史資料室

水戸市水道歴史資料室は、1999（平成11）年に楮川浄水場内（管理本館2階）に開設された資料室です。室内には、市指定文化財である笠原水道絵図をはじめ、本市の水道史に関する資料やパネル等を展示しています。

サ 水戸芸術館

水戸芸術館は、水戸市制100周年を記念し、1990（平成2）年に開館した複合文化施設で、公益財団法人水戸市芸術振興財団が運営しています。

内部には、コンサートホールATM、ACM劇場、現代美術ギャラリーの三つの独立した施設があり、音楽、演劇、美術の3部門がそれぞれに、自主企画による多彩で魅力あふれる事業を実施しています。

また、高さ100メートルの塔（シンボルタワー）をはじめとする磯崎新の設計による独創的な建物は、本市のシンボルであり、文化財的価値を有しています。

③ 私立の博物館（法人等を含む）

ア 徳川ミュージアム

徳川ミュージアムは、水戸徳川家13代当主徳川圀順が、伝来の大名道具や古文書類を寄贈し、1977（昭和52）年に開館した博物館で、公益財団法人徳川ミュージアムが運営しています。

徳川家康の遺品（駿府御分物）を中心に、水戸藩の歴代藩主やその家族の什宝類や古文書類約6万点が収蔵・展示されています。水戸徳川家に関するまとまった歴史資料が見学できる唯一の博物館です。

イ 藝文ギャラリー

藝文ギャラリーは、1989（平成元）年に常陽郷土会館内に設立した展示室で、公益財団法人常陽藝文センターが運営しています。ギャラリーでは茨城県ゆかりの芸術家の作品世界を紹介する「郷土作家展シリーズ」を年6回企画開催しているほか、ロビーでは展示作家の制作風景や芸術観等を収録した映像を会期中放映しています。



水戸芸術館(五軒町)

音楽、演劇、美術の各分野の専用空間を持ち、本市の芸術活動の拠点であるとともに、世界にその活動を発信する場ともなっています。



藝文ギャラリー(三の丸)

郷土作家の作品を鑑賞できる貴重なギャラリーです。併設する藝文プラザでは絵画や写真等、グループ・個人の発表の場として活用されています。

ウ 常陽史料館

常陽史料館は、1995（平成7）年に開館した博物館で、公益財団法人常陽藝文センターが運営しています。郷土の歴史や芸術文化、金融経済に関する資料を収集しており、館内には、貨幣や銀行に関する資料を常設展示しているほか、企画展示も随時開催しています。

エ 茨城大学地球環境資料展示室

茨城大学地球環境資料展示室は、茨城大学水戸キャンパス内に開設されている展示室で、理学部地球環境科学コースが運営しています。大学開設以来の教育研究を通して収集、調査、収蔵してきた鉱物、岩石、化石標本をはじめとする貴重な地学関係資料が展示されています。

オ 常磐神社義烈館

義烈館は、常磐神社敷地内に1957（昭和32）年に開設された博物館で、宗教法人常磐神社が運営しています。館内には、市指定文化財である陣太鼓しんたいこをはじめ、徳川光圀みつくに、斉昭なりあきの遺品遺墨いひんいぼく、家臣の書画等の資料が展示されています。 ※令和7年8月現在休館中

カ 梅酒と酒の資料館 別春館

別春館は、近世から続く酒造である明利酒類株式会社が運営する博物館兼酒蔵です。往年の酒造りの道具類を展示するとともに、梅酒蔵を併設しています。施設は酒蔵を改造したもので、施設本体も文化財的価値を有しています。

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

資料



3 歴史的背景

(1) 原始（旧石器時代～古墳時代）

① 旧石器時代

日本列島で人類が活動したと確認されるようになるのは約3万年前で、この年代の遺跡は列島の各地で発見されています。本市及びその周辺地域（以下「水戸地域」という。）でも^{じゅうまんばらいせき}十万原遺跡（藤が原）から約3万年前の石器集中地点が検出されており、この時期から水戸における人類の時代が始まったことが分かります。一方、旧石器時代の考古資料の検出を目的にしない発掘調査が多いことから、市内の旧石器時代資料（縄文時代草創期（約1万6,500年前～1万1,500年前）を含む。）の大半は単独出土資料、後世の混入資料、表面採集資料等にとどまり、^{かりば}住まいや狩場など、当時の生活をうかがう資料が乏しいのが現状です。

② 縄文時代

水戸地域において土地利用が活発化するのには縄文時代からです。縄文時代早期（約1万1,500年前～7,000年前）の遺跡はそれほど多くありませんが、^{ばばじりいせき}馬場尻遺跡（飯富町）から約9,000年前の土器が出土しており、早期から水戸に人々が定住していたことが判明しています。

縄文時代前期（約7,000年前～5,470年前）に縄文海進がはじまると、海岸線が千波湖周辺まで及び、^{やたかいづか}柳崎貝塚（千波町）、^{やたかいづか}谷田貝塚（谷田町）等の貝塚が形成されました。前期の代表的遺跡は大串貝塚（塩崎町）があります。同貝塚は県内屈指の前期貝塚であるとともに、養老年間（717～724年）に成立した『常陸国風土記』に記述があり、世界で最も古く記録された先史時代の遺跡であることでも知られています。

縄文時代中期（約5,470年前～4,420年前）になると、遺跡の数が増え、^{したばけいせき}下畑遺跡（元石川町）、^{あかついせき}坏遺跡（河和田町）、^{わたりにょういせき}渡里町遺跡（渡里町）等で大規模な集落跡が確認されるなど、集落の規模が広がっていきました。

縄文時代後期から晩期（約4,420～2,350年前）は遺跡の数が減少します。土地利用の様相は不透明ですが、^{かねあらざわいせき}金洗沢遺跡（全隈町）から精巧な土器や信仰のために使われた^{どくうど}土偶、^{ばん}土版が出土しています。また、関東地方と東北地方の両方の文化圏の土器が出土しており、文化の中間地域としての特色があります。

③ 弥生時代

弥生時代の最大の特色は、稲作の開始です。人々のライフスタイルが一変し、都市や国家の形成、そして争いが起こりました。

水戸地域では那珂川流域の台地上を中心に弥生時代の遺跡や遺物が確認され、本市の歴史文化の特徴の一つである農耕社会が到来しました（→83ページ）。

弥生時代後期（1世紀中頃～3世紀中頃）になると、^{やくおういんりがいせき}薬王院東遺跡（元吉田町）や^{みがわつか}見川塚^{ばけいせき}畑遺跡（見川町）等で大きな集落が営まれるようになりました。

この時期の水戸地域の遺跡から出土する弥生土器は、^{じゅうおうだいしきどき}十王台式土器と呼ばれる地域色の濃い土器が中心となり、独自の文化圏を形成していました。



十万原遺跡出土石器(埋蔵文化財センター所蔵)

十万原遺跡で出土した3万年前の石器です。水戸の人類の足跡を示す最も古い物証です。



大串貝塚出土遺物

(埋蔵文化財センター所蔵/市指定考古資料)

大串貝塚で出土した土器や貝製品・骨角製品です。貝塚のある縄文集落における漁撈・狩猟の暮らしぶりを示す貴重な遺物です。



水戸台地出土弥生・古墳時代折衷土器群

(埋蔵文化財センター所蔵/市指定考古資料)

左が大鋸町遺跡、右が大塚新地遺跡出土土器です。弥生時代と古墳時代の様式を折衷した性格を持ち、弥生時代から古墳時代への移行期を示す貴重な資料です。

弥生時代の終わりから古墳時代のはじめにかけては、大鋸町遺跡(元吉田町)や大塚新地遺跡(大塚町)において、十王台式土器と古墳時代の土師器の特徴が折衷した土器が出土しており、次第に古墳文化に移行していく様子が判明しています。

④ 古墳時代

古墳時代は、ヤマト政権の支配が水戸地域にも及ぶようになり、支配者の墳墓として古墳が築造されました。

古墳時代前期(3世紀中頃～4世紀)の古墳は、二の沢B遺跡(藤井町)で検出された前方後方形の周溝墓や、安土屋古墳(同古墳群第1号墳、飯富町、前方後方墳)があります。これらの周溝墓や古墳は那珂川流域でも最初期に造営されたもので、水戸地域にいち早く古墳文化が伝わったことを示しています。

古墳時代中期(5世紀)の古墳は、那珂川右岸の台地上に立地する愛宕山古墳(愛宕町)が挙げられます。同古墳は全長140メートルの前方後円墳(全長は県内3番目)で、造営時



期は5世紀前半と考えられています。周辺地域にこれほどの規模を持つ古墳はなく、この頃にヤマト政権との密接な関係を持ち、強大な権力を保持した在地首長が水戸地域に存在したことを示しています。

古墳時代後期（6世紀）には、多数の古墳が築造されました。このうち発掘調査が行われた主な事例としては、北屋敷古墳^{きたのやしきこふん}（大串町、6世紀後半）、牛伏古墳群（牛伏町・黒磯町、4世紀後半～6世紀後半）、ニガサワ古墳群（藤井町、6世紀後半～7世紀前葉）があり、水戸地域の各地に大小の在地首長が存在し、古墳や集落が営まれたことが判明しています。



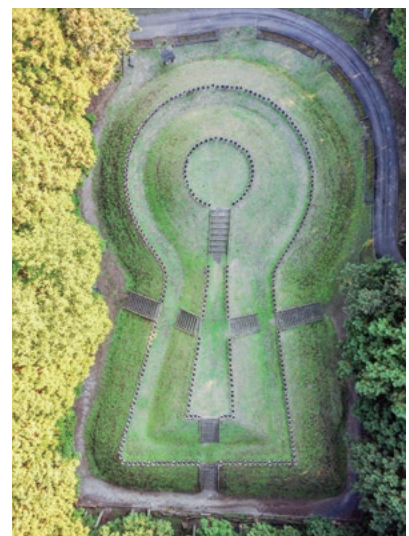
愛宕山古墳
(愛宕町/国指定史跡)

墳丘全長140mを有する、県内を代表する中期の古墳です。地域社会の支配者として君臨した首長の墳墓と考えられます。



吉田古墳(元吉田町/国指定史跡)

古墳時代終末期の八角形墳です。墳丘内部の石室には線刻壁画が描かれています。線刻を持つ八角形墳は全国唯一です。



牛伏4号墳(牛伏町外)

古墳時代後期に造営された全長52mの前方後円墳です。地域の中で中程度の首長の墳墓と見られます。



(2) 古代（飛鳥時代～平安時代）

① 飛鳥時代（古墳時代終末期）～奈良時代

那珂川右岸の台地平坦部に造られた吉田古墳（同古墳群第1号墳、元吉田町）は、横穴式石室の奥壁に線刻で武具等が描かれた装飾古墳です。造営時期は7世紀中葉と推定されています。墳形は八角形墳で、大陸文化と関わりのある有力首長の墳墓と考えられています。

古代は、全国で国・郡・里の地方制度が整えられました。水戸地域は常陸国となり、那賀郡に属しました。各郡には郡家（郡衙）が置かれ、那賀郡家は台渡里官衙遺跡群（渡里町）周辺に置かれたと推定されています。同遺跡群の発掘調査では、7世紀第4四半期に郡家に附属する寺院である郡寺の造営が開始され、8世紀には正倉院の造営が開始されたことが確認されています。

また、台渡里官衙遺跡群から見て那珂川の対岸にある田谷遺跡（田谷町）から、官衙に関連する遺物である古代瓦が出土しており、周辺に古代の駅家である河内駅家があったと考えられています。

さらに、那珂川と涸沼川の合流点に面する標高約5メートルの低湿地帯に、平津駅家（平戸町）が設置されていたことが『常陸国風土記』に記されているほか、平戸町から約1.7キロメートル北西の台地上にある大串遺跡（大串町）からは、那賀郡家正倉別院と考えられる大型掘立柱建物跡や穀物を収めた倉庫である正倉跡が検出されるなど、市内各所で官衙関連の遺構・遺物が検出されています。

② 平安時代

9世紀に至り、朝廷による地域支配が衰えると、812（弘仁3）年、河内駅家が廃止され、那賀郡家の勢力が衰退していったと考えられています。

一方、10世紀までに、常陸第三宮である吉田神社（宮内町）が次第に勢力を持ち、10世紀前半に私称の郡である吉田郡を形成し、那賀郡から独立するほどの政治的・宗教的勢力となりました。こうして吉田神社は、別院である吉田薬王院とともに那珂川流域において勢力を拡大していきます。

935（承平5）年から940（天慶3）年にわたる平将門の乱は、朝廷を混乱させる出来事であった一方、常陸地方の武士が成長していく契機となりました。乱鎮圧に加わった平繁盛の子孫である常陸平氏がその勢力を伸ばし、一族の吉田氏と石川氏が水戸地域を中心とした吉田・那賀両郡に勢力を拡大しました。

12世紀前半までには吉田氏が郡司となり、在庁官人（地方官僚）として吉田郡を勢力下に置き、吉田神社と対抗しながら中世を迎えます。

(3) 中世（鎌倉時代～安土桃山時代）

① 鎌倉時代

平安時代末～鎌倉時代初期に水戸地域を勢力下に置いたのが、常陸平氏一族で石川次郎家幹の次男である馬場小次郎資幹です。資幹は御家人として鎌倉幕府に仕えるとともに、国を治める役職である大掾職を継承し、常陸平氏一族の長である惣領となりました（以下「大掾氏」という。）



台渡里官衙遺跡群(渡里町／国指定史跡)

那賀郡家跡です。南から南方地区、観音堂山地区、長者山地区とエリア分けしています。南方地区・観音堂山地区は郡寺の跡、長者山地区は正倉の跡です。政庁跡はまだ発見されていません。



大串遺跡(大串町)

大串遺跡には、那賀郡家(台渡里官衙遺跡群)とは別の場所に租税(穀物)を納めた官衙の跡(那賀郡家正倉別院)があったと考えられています。

吉田神社(宮内町)

おおいじんじや ふじうちじんじや
大井神社・藤内神社とともに、市内で最古の由緒を持ち、格式の
高い神社です。日本武尊を祭神としています。





資幹は上市台地東側の先端に城館（馬場館）を構え、水戸地域支配の拠点とします。これが現在の水戸城（三の丸）です。大掾氏は支配域北部の拠点として水戸城を位置付けるとともに、南部の拠点として常陸国府のある府中（石岡市）を位置付け、水戸・府中を中核として支配を実現していたと考えられます。

さらに、資幹の子らはそれぞれ水戸地域（青柳、袴塚、見川、枝川、八辻、河和田、宇木等）に根を下ろし、水戸地域の支配を強化していきました。

② 南北朝時代～室町時代

南北朝の動乱は常陸にも波及し、大掾氏は南朝方として争乱のただ中にありました。その中で常陸守護の佐竹氏は北朝に味方して着々と領土を拡大し、14世紀中頃には水戸地域の南北を佐竹勢力が挟み、次第に大掾氏の勢力が弱まりました。

そしてこの時期、那珂東郡江戸郷（那珂市下江戸）の土豪である那珂通泰の子通高が江戸氏を名乗り、佐竹氏配下となっていました。江戸氏は1387（嘉慶元・元中4）年の難台山城の戦いで軍功を挙げ、鎌倉公方の足利氏満は大掾氏旧領の河和田、鯉淵及び赤尾関の地を通高の子である通景に与えました。通景は河和田城を本拠とし、さらに領土を拡大して中妻三十三郷と呼ばれる広大な領域を手中に収めます。また佐竹氏家中にあって小野崎氏、小貫氏らとともに宿老（重臣）の地位を獲得するほどになりました。

1426（応永33）年頃、通景の子通房は大掾満幹が城主となっていた水戸城を急襲し、これを奪取しました。これによって大掾氏は水戸地域の支配権を失い、江戸氏が水戸城を居城として勢力を拡大しました。

江戸氏の領域は時代によって変動はありますが、現在の水戸市、大洗町、ひたちなか市及び茨城町の大部分と、那珂市、笠間市及び小美玉市の一部を支配し、常陸有数の武家にまで勢力を伸ばしました。水戸市は国田地区及び飯富地区の一部が佐竹領でしたが、他は全て江戸領であったと考えられています。

江戸氏が水戸地域の支配を固めた15世紀後半は、水戸が都市として成立した時期でもあります。この頃までには、常陸を南北に貫く主要道である鎌倉街道下道が水戸の地で那珂川と交差しており、那珂川流域に進出した江戸氏によって水陸交通の結節点となる水戸の地が城下として整備されました。水戸は、中世常陸の主要道と主要河川が交わる交通の要衝に形成された都市だったのです。

③ 安土・桃山時代

1590（天正18）年、豊臣秀吉が小田原城を攻め、北条氏を滅ぼすと、水戸地域を含む常陸の勢力図が大きく変化しました。佐竹義宣は小田原城攻めに参陣し、秀吉に従いましたが、江戸重通は参陣しなかったため、秀吉は佐竹氏に江戸領の支配を認めました。

同年、義宣は水戸城を攻めて江戸氏を追放し、周辺の支城も次々と落としました。こうして7代160年に及んだ江戸氏の水戸地域支配は終わり、代わって佐竹氏が水戸地域を支配しました。

1591（天正19）年、義宣は居城を太田城（常陸太田市）から水戸城に移します。義宣は常陸54万5,800石を領する国内有数の大名となり、関東平野に面し、水陸交通の要衝であ



る水戸城を拠点としました。

義宣は1592（天正20）年には城内鎮守として八幡宮（移転を経て現在は八幡町）を創設、1593（文禄2）年からは水戸城及び城下町の大改修を実施するなど、大規模な普請・作事（土木工事）を行います。こうして義宣の時代に、現在の本市中心市街地の祖型が形成されました。



河和田城
(河和田町/市認定地域文化財(史跡))
江戸氏が水戸に進出した時、はじめて居城とした城です。居城を水戸城に移してからは重臣の春秋氏が城主に置られました。



江戸氏時代の水戸城

江戸氏が水戸城主だった時代は、内城（現在の水戸第一高等学校の校舎部分）と宿城（現在の水戸第三高等学校、茨城大学附属小学校、第二中学校）の二つの曲輪（区画）で構成されていました。



図1-12 中妻三十三郷の城館
(水戸市内に限る。)

中妻三十三郷は江戸氏の基盤となった支配地域です。現在の飯富・赤塚・双葉台・内原中学校区と笠間市の一部の範囲に広がり、多くの城館が築られました。



佐竹義宣肖像(天徳寺所蔵)

佐竹義宣(1570-1633年)は、秀吉の後ろ盾のもと常陸国の統一を達成し、居城を水戸城に移しました。1602(慶長7)年に出羽国に転封となりました。



八幡宮本殿(八幡町/国指定重要文化財)

水戸八幡宮本殿は1598(慶長3)年に建築されました。豪放な木割り^{きわり}と洗練された彫刻が特徴で、水戸地域の桃山時代を代表する建造物です。

(4) 近世(江戸時代)

① 水戸徳川家の成立

1600(慶長5)年の関ヶ原合戦後から2年後の1602(慶長7)年、佐竹義宣は突如^{とつと}出羽国(秋田県)に転封(移転)となります。代わって徳川家康の5男・武田信吉が下総佐倉4万石から水戸15万石の領主となりました。しかし、信吉は翌1603(慶長8)年に死亡し、家康の10男長福丸(後の紀州藩初代藩主頼宣)が水戸20万石の領主となりました。1609(慶長14)年、頼宣は駿河・遠江・東三河50万石に転封となり、代わって11男頼房が下妻より25万石で入城しました(1701(元禄14)年に35万石)。この徳川頼房を初代として、水戸徳川家は11代にわたって水戸藩を領し、御三家に列せられました。



- 大掾氏時代の城域
- 江戸氏時代に拡張
- 佐竹氏時代に拡張
- 水戸徳川家時代の惣構

水戸城と城下町の構造 (国立公文書館内閣文庫所蔵「常陸国水戸城絵図」／国指定重要文化財を改変)

水戸城は中世初頭から近世前期まで、大掾氏・江戸氏・佐竹氏・水戸徳川家が城主となり、城を徐々に拡張していきました。最終的には下の丸・本丸・二の丸・三の丸の四つの主郭を中心に、その東西の城下町(上町・下町)を堀や土塁で取り囲む惣構を築きました。

② 江戸時代前期

頼房は1625(寛永2)年、水戸城東方の低湿地を埋め立てて新たに下町を造成する(田町越)など、同年から1638(寛永15)年にかけて城郭及び城下町の整備を行います。この結果、水戸城下町は水戸城主郭(下の丸・本丸・二の丸・三の丸)を中心に、西方の台地上に上町、東方の低地に下町が展開する、全国的にも特異な双子町の構造となりました。

1661(寛文元)年、頼房の3男で第2代藩主となった光圀は、藩内整備を強力に推進した藩主として知られています。翌1662(寛文2)年に下町の飲料水不足解消のため笠原水道(笠原町ほか)を開設したのを皮切りに、常磐・酒門共有墓地の設置(松本町・酒門町、1666(寛文6)年)、柳堤の整備(1690(元禄3)年頃)等の施策を次々と実施し、その後の水戸城下の都市計画に大きな影響を及ぼしました。

さらに、光圀は文教政策にも力を入れ、史書『大日本史』の編さんに着手したことは有名です。世子(跡継ぎ)時代の1657(明暦3)年に江戸駒込の水戸藩邸に史局を設立したのがはじまりで、1672(寛文12)年、史局は「彰考館」と命名され正式に開館しました。1698(元禄11)年には水戸城二の丸内にも彰考館を設置し、史書編さんは江戸彰考館(江



徳川光圀肖像(立原杏所筆、茨城県立歴史館所蔵)

徳川光圀(1628-1700年)は、水戸藩第2代藩主です。数々の重要な施策を行い、水戸藩の基礎を築きました。「水戸黄門」のモデルとしても有名です。



笠原水道
(笠原町外/県指定史跡)

徳川光圀の命により、1663(寛文3)年に竣工した上水道です。総延長は10,751メートルに及び、当時としては珍しい暗渠水道でした。



『大日本史』(刊本、水戸市立博物館所蔵)

神武天皇から後小松天皇までの治世を記した全402巻の歴史書です。光圀死後も編さんは続けられ、完成したのは1906(明治39)年のことでした。

館)と水戸彰考館(水館)の2か所で約130年間にわたって行われましたが、1829(文政12)年に江戸彰考館が廃止となり、史局は水戸彰考館に統合されました。

光圀による史書編さん事業は、幕末期に『大日本史』が全国の藩校等の学校に備えられたことはもとより、『礼儀類典』、『万葉代匠記』等の様々な関連書の刊行、上侍塚古墳・下侍塚古墳(栃木県大田原市/国指定史跡)の発掘(1692(元禄5)年)など、多方面に及び、水戸藩の学問的伝統は近世日本における学問・教育の発展に大きく寄与しました。

編さん事業は光圀死後(1700(元禄13)年以降)も近世を通じて継続され、完成を見たのは1906(明治39)年のことです。

1690(元禄3)年、第3代藩主となった徳川綱條は、深刻化する財政難を解消するため、宝永の新法と呼ばれる財政改革に着手します。この改革は1703(元禄16)年から1709(宝永6)年にかけて実施され、藩札の発行や松波勘十郎による紅葉運河・大貫運河の開鑿事業等が行われました。しかし、重い負担に耐えかねた百姓が1708(宝永5)年から翌年に一揆を起し、勘十郎父子の追放によって改革は挫折しました。



水戸城天守(三階櫓)古写真(水戸市立博物館所蔵)

水戸城の天守は二の丸にあり、1764(明和元)年に焼失し、1771(明和8)年に再建されました。外観は3層、内部は5階建ての櫓形式で「御三階」などと呼ばれていました。



此君堂跡(立原翠軒屋敷跡、柳町2丁目)

立原翠軒(1744-1823年)の屋敷跡です。翠軒は停滞していた『大日本史』編さん事業を軌道に乗せるとともに、藤田幽谷や小宮山風軒等の人材を育てました。

③ 江戸時代中期

1718(享保3)年、第4代藩主となった徳川宗堯も財政難の解消に取り組みますが(享保の新政)、1730(享保15)年に急死します。同年、第5代藩主となった徳川宗翰の代に、幕府の命による財政改革が実施されますが、十分な成功を収められませんでした(寛延・宝暦の改革)。1764(明和元)年には水戸城で出火し、屋形(御殿)や天守(三階櫓)以下をことごとく焼失したほか、1766(明和3)年には城下町の大火が起こり、下町がほぼ全焼したとされています。

同年、第6代藩主となった徳川治保は、長きにわたって藩主を務めました。治保は前代から引き継いだ財政危機とともに、天明飢饉による農村の荒廃に対応するため、産業振興や農村の立て直しに力を注ぎました。また、停滞していた『大日本史』編さん事業を再興するなど学問重視の姿勢を打ち出し、長久保赤水、立原翠軒、藤田幽谷ら優秀な人材を登用しました。

④ 江戸時代後期

1805(文化2)年、第7代藩主となった徳川治紀は外国船の接近に備え軍制改革に着手します。こうした治保・治紀の文武両面にわたる治世は、後の第9代藩主斉昭による改革の先駆けとなりました。



徳川齊昭肖像
(大洗町幕末と明治の博物館所蔵)

徳川齊昭(1800-1860年)は水戸藩第9代藩主です。幕末に藩政改革を断行するとともに、幕政にも積極的にに関わり、藩内外に影響力を及ぼしました。



会沢正志斎肖像(個人所蔵)

会沢正志斎(1782-1863年)は幕末を代表する学者です。藤田東湖とともに徳川齊昭の政治を支え、著書『新論』は尊王攘夷運動に大きな影響を与えました。



藤田東湖肖像
(大洗町幕末と明治の博物館所蔵)

藤田東湖(1806-1855年)は藩主齊昭の信任を経て藩政や幕政に関わるとともに『弘道館記述義』『回天詩史』を著し幕末の志士の信望を集めました。

1816(文化13)年に第8代藩主となった^{なりのぶ}齊脩の代には、諸外国の船が頻繁に現われ、1824(文政7)年には^{おおつはま}大津浜(北茨城市)にイギリス人が上陸する事件が起きます。幕府の対外政策に危機感を募らせた^{あいざわせいしさい}会沢正志斎は『新論』を著して^{しんろん}攘夷を^{しょうい}主張するなど、水戸藩は攘夷の急先鋒として全国から注目を集めました。

こうした国内外の経済的危機と政治的危機を乗り越えるべく、藩政改革に取り組んだのが1829(文政12)年に就任した第9代藩主^{なりあき}徳川齊昭でした。齊昭は、^{ふじたとうこ}会沢正志斎や藤田東湖といった学者を登用し、藩政の改革に乗り出します。

藤田らの主張は実践的かつ藩を超えて日本一国を対象とした点に大きな特徴があり、彼らの主張や著作は幕末の思想に大きな影響を与えました。

齊昭は就任直後から藩政改革に着手し、儉約の徹底、軍政改革と^{おいとりがり}追鳥狩の実施、^{けん}藩内総検地、^ち藩校弘道館の建設、^{しよくさんこうぎやう}偕楽園の造成、郷校の増設、社寺改革、^{しよくさんこうぎやう}殖産興業等多岐にわたる施策を実施しました(天保の改革)。

しかし、急激な改革に反発する勢力も現れ、1844(天保15)年に齊昭は幕府から隠居・謹慎を命じられました。



弘道館(三の丸／国指定特別史跡)

弘道館は旧水戸藩の藩校です。斉昭が推進した藩政改革の重要施策の一つとして1841(天保12)年に開設され、文武の多様な教育が教えられていました(→56ページ)。



偕楽園(常磐町／国指定史跡・名勝)

偕楽園は斉昭自ら造園構想を練り、1842(天保13)年に開園した大名庭園です。領民に開放する目的を掲げるなど近代の公園に近い性格を持っていました(→57ページ)。

⑤ 幕末期

1844(天保15)年に第10代藩主となった徳川^{よしあつ}慶篤の代には、斉昭の復権を目指す改革派と門閥派^{もんばつは}との対立が深刻化しました。こうした中、1853(嘉永6)年にペリーが来航し、開国を求めたことから、我が国の歴史は大きな転機を迎えます。

同年、斉昭は幕府から海防参与^{かいぼうさんよ}に任じられ、水戸藩は幕末の国政に深く関与することとなりました。特に、日米修好通商条約^{にちべいしゅうこうつうしょうじょうやく}の調印問題に加え、第13代将軍家定^{いえさだ}の後継をめぐる争いは、彦根藩主井伊直弼^{いなおすけ}ら南紀派と、斉昭ら一橋派^{ひとつばしは}に二分され、幕府・朝廷・諸大名・尊攘志士^{そんじょうし}らを巻き込む全国規模の政争に発展し、水戸藩は一橋派の頭目^{とうもく}と目されるようになりました。



1858（安政5）年、大老に就任した直弼によって条約は調印され、南紀派が推す徳川家茂^{いえもち}が第14代将軍となります。斉昭・慶篤をはじめ一橋派の諸大名は処罰され、尊攘志士に対する弾圧が行われます（安政の大獄^{あんせい たいごく}）。1860（安政7）年、弾圧に怒った水戸浪士らが直弼を暗殺する事件が起き（桜田門外の変^{さくらだもんがい へん}）、その5か月後に斉昭が死去します。強力な指導者を失った藩内は、激派^{げきぱ}（尊攘急進派。後に天狗党とも呼ばれました。）、鎮派^{ちんぱ}（尊攘穏健派）、諸生派（門閥派）等の派閥が主義主張をめぐる分裂し、内部抗争化していく中で、国政における水戸藩の求心力は急速に低下していきました。

1867（慶応3）年、斉昭の7男で第15代将軍の徳川慶喜^{よしのぶ ほうかん}が大政を奉還し、2世紀半続いた江戸幕府を終焉させるといふ、重要な決断を行う一方で、水戸藩内では1864（元治元）年から1868（明治元）年にかけて、筑波山拳兵、那珂湊の戦い、天狗党の西上^{さいじょう}、敦賀での処刑^{ほんごくしげい}、本圀寺勢の下向^{ほんくわんじせいの げきえつ}、北越戦争、弘道館の戦い、松山戦争など、各派閥が複雑に絡み合う紛争が繰り広げられ、水戸藩は国政に主体的に関わることなく、明治維新を迎えました。

(5) 近・現代（明治時代～）

① 水戸市の成立

1868（明治元）年、水戸藩最後の藩主に就任したのがパリ留学を経験した徳川昭武^{あきたけ}です。昭武は新政府に応じる形で藩内改革に取り組み、翌年^{ほんせきほうかん}版籍奉還^{ちほんじ}によって知藩事となってからも北海道開拓に意欲を示しますが、1871（明治4）年の廃藩置県^{はいはんちけん}により、水戸藩は廃藩となりました。

水戸藩は水戸県と名称を変え、その後周辺の県の統廃合が進む中で茨城県が誕生します。茨城県庁は旧弘道館に置かれ、後に弘道館調練場跡^{ちようれんじょう}（現在の茨城県三の丸庁舎）に移転します。1999（平成11）年に笠原町へ県庁が移転となるまで、水戸城跡周辺は中～近世に続いて政治の中心地として機能していきました。

しかし、藩から県への移行は必ずしもスムーズに進んだわけではなく、1872（明治5）年に水戸城が何者かに放火される事件が起きました。新政府により水戸が支配されることに対する、旧藩士族の反発が原因とされています。

明治政府は旧藩士族の就労を進めるとともに、水戸の商工業の振興を積極的に進めました。さらに、徳川光圀と斉昭を祀る常磐神社の創設を認め、光圀と斉昭二人に神号^{しんごう}を与えました。こうした旧藩士族の不満を抑える努力もあり、茨城県政は少しずつ安定していくことになりました。

1889（明治22）年に市制・町村制が施行されると、上市^{うわいち}・下市^{しもいち}（近世の上町・下町）のほかに、常磐、細谷、吉田及び浜田4村の各一部を合併し、全国31市の一つとして「水戸市」が誕生しました（関東地方では、横浜市及び水戸市の2市のみ）。また、現在の市域の他地域では、常磐村が独立の村となったほか、旧来の村々が合併して緑岡村、上大野村、渡里村、柳河村、酒門村、国田村等の新しい村が誕生しました。

② 近代都市の発展

明治以降、全国で多くの都市的施設が徐々に整備されていく中、本市も近代都市として発展しました。



徳川慶喜肖像写真(茨城県立歴史館所蔵)

徳川慶喜(1837-1913年)は徳川齊昭の7男として生まれ、弘道館に通学して勉学に励みました。1867年に徳川宗家を継ぎ、第15代将軍になりました。翌年大政奉還を上奏し、江戸幕府を終わらせました。



天狗党の墓
(福井県敦賀市／国指定史跡「たけだ こうんさいとうのか武田耕雲斎等墓」)

1864年、筑波山で挙兵した激派は、那珂湊の戦いで幕府軍に敗れた後、京都を目指し1,000人余りが行軍しました(天狗党の西上)。一行は敦賀で幕府に降伏し、翌年352人が処刑されました。



諸生派の墓(千葉県そうま匝瑳市／
匝瑳市指定史跡「脱走塚(水戸藩士の墓)」)

1868年、匝瑳郡松山で天狗・諸生両派の最後の戦争が行われ(松山戦争)、敗北した諸生派(松山勢)の戦死者がここに葬られました。



常磐神社(常磐町1丁目)

常磐神社は1873年、偕楽園の一部約3万平方メートルをさいて県社として創建されました。徳川光圀・齊昭を祭神としています。



旧茨城県庁舎
(三の丸／現茨城県三の丸庁舎)

茨城県庁舎ははじめ弘道館に置かれ、1882年に弘道館調練場跡地に庁舎が建設されました。現在残るゴシック様式の旧県庁舎は1930年の竣工です。



近世城下町から近代都市への移行に際して、1873（明治6）年頃に水戸城惣構の最西端の堀が埋め立てられるなど、明治初年から徐々に城下町の遺構は解体され、都市の近代化が進みました。特に1886（明治19）年、上市大火によって上市の約8割が焼失したことを契機として、県知事安田定則^{やすださだのり}が1887（明治20）年に着手した市街地の市区改正事業は、1888（明治21）年の東京府による市区改正（都市計画）事業に先行するものであり、日本人の手による最初の都市計画と評価されています。

1889（明治22）年に水戸鉄道（現在の水戸線及び常磐線の一部）が開通すると、商業や金融業が発展しました。特に「水戸の観梅^{かんばい}」や「水戸納豆」は、鉄道網の発展とともに脚光を浴び、広く知られるようになりました。

1904（明治37）年の日露戦争後、日本の軍備拡張により水戸に歩兵第二連隊を中核とする陸軍の衛戍^{えいじゆ}（駐屯地）が設置されました。以後、水戸は軍都としての性格も帯びるようになります。

1914（大正3）年の第一次世界大戦による国内景気の回復に伴い、造船業で急成長した内田信也^{うちだのぶや}の寄付をもとに1920（大正9）年には水戸高等学校（旧制）が設立されました。同校は全国13番目の官立高等学校で、各界に多くの有為の人材を出しました。こうして本市は教育・文化の中心地としての機能も果たし、学都としての性格も備えるようになりました。

③ 戦争の拡大と終戦

1929（昭和4）年の昭和恐慌^{しょうわきょうこう}を経て、我が国は軍国化の道を進み、本市でも農本主義^{のうほんしゆぎ}と国家主義の活動が活発になりました。1932（昭和7）年に起こった血盟団事件^{けつめいだんじけん}と五・一五事件は、大洗の護国堂^{いのうえにつしやう}に拠る井上日召^{いのかづ}と、常磐村で農場を経営し、愛郷塾^{あいきやうじゆく}を主宰した橘孝三郎^{たちばなこうざぶろう}が参加し、彼らの影響を受けた本市近辺の農村青年が加わりました。

1931（昭和6）年に勃発した満州事変^{ぼつぱつ}後、国は旧満州（以下「満州」という。）の実効支配を進めるため、移民（満蒙開拓）を国策化しました。1937（昭和12）年、日本国民高等学校（現日本農業実践学園）校長の加藤完治^{かとうかんじ}らは、政府に「満蒙開拓青少年義勇軍編成二関スル建白書^{けんぱくしよ}」を提出し、満蒙開拓青少年義勇軍制度が開始されます。国内唯一の義勇軍訓練所として旧下中妻村に満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所が、旧河和田村に河和田分所が、旧鯉淵村に幹部訓練所がそれぞれ創設され、全国から集まった約10万人の青少年が訓練を受け、満州に渡るなど、満蒙開拓政策における国内本拠地の一つとなりました。

1937（昭和12）年の日中戦争開戦、1941（昭和16）年の太平洋戦争開戦により、本市も戦時体制下に入り、政治・経済統制を強いられる中、多くの市民が戦地で兵役に就くことになりました。水戸歩兵第二連隊は、日中戦争後は満州に駐屯していましたが、1944（昭和19）年にパラオ諸島ペリリュー島の守備に就き、同年11月24日に全滅（玉砕）します。

一方、市内でも多くの市民が物資の窮乏に耐えながら戦争遂行に協力しますが、1945（昭和20）年8月2日未明に起きた水戸空襲は、全市戸数の90パーセントに当たる10,104戸が罹災^{りさい}し、死者317名以上を出す大惨事でした。市街地の大半は焼失し、水戸城三階櫓や偕楽園の好文亭等の多くの歴史的建造物やまちなみを失うなど、水戸は文字どおりの焦土^{しょうど}となって終戦を迎えました。



1935(昭和10)年頃の観梅風景
(出典:『水戸百年』水戸市100年委員会発行、1989年)
水戸の観梅の始まりは1896年と言われています。1899年に運行した観梅列車が大成功を収め、水戸の早春の風物詩として定着しました。



歩兵第二連隊の営門
(出典:『水戸百年』水戸市100年委員会発行、1989年)
1909年、歩兵第二連隊は現在の茨城大学の敷地に当たる地に入営しました。出征や帰還時には市民総出で迎えるなど、戦争の喜び・悲しみを市民と分かち合いました。



旧制水戸高等学校
(出典:『水戸百年』水戸市100年委員会発行、1989年)
旧制水戸高等学校は、1920年、現在の水高スクエアや第一中学校のある一帯に創設されました。全国から学生が集まり、戦前の自由主義をおう歌しました。



満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所(所蔵:内原郷土史義勇軍資料館)
1937年、(財)満洲移住協会が現在の小林町に建設した国内唯一の義勇軍訓練所です。敷地面積は26.7ヘクタールに及び、日輪兵舎と呼ばれる円形の建物が300棟以上立ち並んでいました。



④ 戦後の水戸市

空襲により焼失した市街地は、1年後の1946（昭和21）年に南町商店街を中心に復興祭が行われ、翌年には観梅行事も復活するなど、急ピッチで復旧しました。

こうした中、偕楽園公園とその周辺の緑地帯は、都市計画決定によって都市化の波から守られ、かつて「^{いっちょいっし}一張一弛⁴」を体現する庭園であった偕楽園と千波湖を含めたその周辺が都市公園として整備されました。

戦後の本市は、周辺町村との合併を重ねて拡大し、1992（平成4）年に常澄村と合併し、2005（平成17）年に内原町と合併して、現在の市域になりました。

現在、水戸市は歴史と現代が融合した魅力ある都市として発展を続けています。



1965（昭和40）年の水戸の市街地（出典：『水戸百年』水戸市100年委員会発行、1989年）

水戸駅前（中央）から伸びる大通り（現在の国道50号線）沿いに多くの建物が立ち並んでいます。この頃、駅南側はまだ開発が進んでいませんでしたが、その後、目覚ましい発展を遂げていきました。

⁴一張一弛：徳川斉昭の自選による、偕楽園開園の精神を記した『偕楽園記』にある言葉で、「緊張とリラックス」の意味です。緊張して勉学に励む場（一張の場）を弘道館、休息の場（一弛の場）を偕楽園として、両者が一對の施設であることを示しています。

